武蔵野夫人

大岡昇平　著

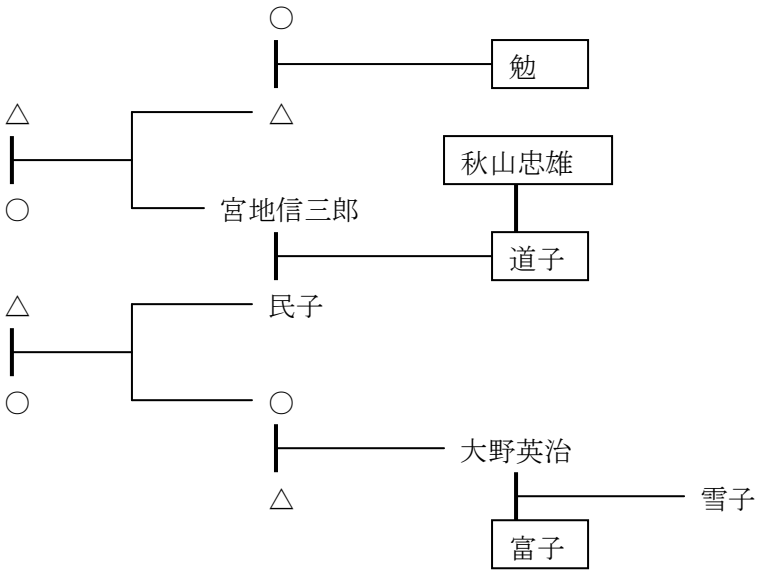
ドルジェル伯爵夫人のような心の動きは時代おくれであろうか

ラディゲ

イントロダクション

貞淑で、古風で、武蔵野の精のようなやさしい魂を持った人妻道子と、ビルマから復員してきた従弟の勉との間に芽生えた悲劇的な愛。――欅や樫の樹の多い静かなたたずまいの武蔵野を舞台に、姦通・虚栄・欲望などをめぐる錯綜した心理模様を描く。スタンダールやラディゲなどに学んだフランス心理小説の手法を、日本の文学風土のなかで試みた、著者の初期代表作のひとつである。

主な登場人物



構成

第一章　「はけ」の人々
第二章　復員者
第三章　姦通の条件
第四章　恋ヶ窪
第五章　蝶の飛翔について
第六章　真夏の夜の夢
第七章　湖の涯
第八章　狭山　※
第九章　別離
第十章　夫の権利
第十一章　カメラの真実
第十二章　離婚の理由
第十三章　秋
第十四章　心

※　村山貯水池、村山ホテルの記述のある部分

第八章　狭山

そのころ別の旅館には別の男女がいた。狭山丘陵の懐ろに抱かれた村山貯水池畔のホテルに勉と道子が嵐に閉じ込められていた。

外には嵐が吹き荒れていた。相模野を横切ったキャスリーン颱風は今関東山地と狭山丘陵の間を東北に抜けようとしていた。

富子に狭山に散歩に誘われたことは、勉に道子を誘う思いつきを与えた。道子がこの危険な申し出に同意したのは、やはり夫の不在の気安さからであったろう。秋山と富子が出かけた次の日であった。大野は娘の雪子を連れて関西にいたから、この日「はけ」の人々は全部留守であった。

朝から曇っていた。新聞は颱風の接近を告げていたが、進路は北北西で、上陸地点を渥美半島と予想していた。駅にも警報の赤い鉄板が掲げられてあったが、せっかく出かけてしまった二人は引き返す気にならなかった。

国分寺から狭山へ向う多摩湖線は、しばらく松や雑木の間から学園なぞの赤い屋根をのぞかせた樹林の間を行った。電車が停ると駅を囲む木立で蝉の声が高くなった。今この時、恐らく武蔵野のあらゆる木々で鳴いているに違いないこの昆虫の斉唱は、その声に充たされた野の広さを思わせた。

電車が国分寺の駅を出てしまうと、道子はほっとした安堵感が胸を領するのを覚えた。勉と二人きりでこうして出かけるのは久しぶりである。それは今の二人の緊張した関係では、思いもかけなかったことであるが、ふとしたきっかけでそれが実現してしまうと、これが二人の間で当然来るべきことで、一番自然のような気がした。彼女はただ解放されたように感じた。この状態が自分をどこへ導くか、それを顧みる暇がないほど安堵は大きく、これまでの恋は苦しかったのである。

やがて林が尽き広い畠が開けた。陸稲や野菜のよく育った間を、桑や茶の木の列が区切り、防風林で囲まれた農家が点在している。遠く地平に何かのタンクが不吉な形を聳えさせていた。

武蔵野はそのゆるやかな起伏の中に、次第に狭山に向って上っているらしく、電車は絶えず勾配の抵抗をモーターの音に感じさせながら走った。そしてやがて前方に眼路を蔽って、屏風のように連なる丘の線が見えて来た。

勉があらかじめ宮地老人の蔵書で調べておいたところによると、狭山丘陵は東京の西方三十キロ、所沢の西南で埼玉県と東京都に跨っている。海抜百五十米、周囲約三十キロの楕円形の丘陵で、十キロ南方の多摩川対岸の丘陵と同じ面に属し、地塁のように武蔵野台地に孤立している。

これは元来古代多摩川の三角洲である。そのころ関東山地の東縁まで入り込んでいた古東京湾の海成層の上に、青梅から流れ出た古代多摩川が、五日市附近で露呈しているとこ

ろから五日市砂礫層と呼ばれる黄褐色の砂礫を沈殿させた。その後幾度かの隆起と沈降を重ねた後、この地塊は、その全体がやはり多摩川の三角洲である武蔵野台地の上に聳えるに至ったが、丘陵は東方の海に向かって開析され、懐ろに二つの谷を発達させている。だから明治末期この谷を閉塞して、青梅から導いた多摩川の水を貯えようとした東京の水道技師は、期せずして古代多摩川の流路を再現したことになる。

南の谷を埋めた村山貯水池は、昭和初期の銀座文化にとって手ごろな遠出の場所であった。湖畔の同伴ホテルはその需要を充たすために生れたものであるが、無論戦争中からさびれて、和洋折衷の異様な建物をいたずらに荒廃させているだけである。現在池畔を賑わすほとんど唯一の客である修学旅行の児童たちは、そういうところでは休まない。地形学の興味からここを訪れた勉は、無論ホテルの存在も知らなかった。

電車が「狭山公園」といわれる終点でとまると、前方を五十尺ばかり高く海鼠色の堰堤が塞いでいるのが見えた。堤の下は芝生の間に径をうねらせた現代風の公園で、ところどころ矮小な松が育っている。勉はそういう都市計画的造園の中を、擽ったいような気持で道子を導き、堰堤の尽きるところからジグザグの階段を上った。

水がそこに満々とたたえられてあった。

丘の頂上からのみ成る低い岸の縁を映して、水深八十尺の静かな水が緑に拡がっていた。小じんまりした異様な円屋根を持った取水塔が水中に突き出ていた。堤の袂の事務所らしい洋風の建物は附近の飛行場の将校集合所になっているらしく、「立入禁止」の立札が立てられていた。

勉は顧みた。ここは丘陵南側の谷のほぼ中央で、視界はなお両側に延びた丘の稜線によって遮られていた。谷の出口には小丘や森が起伏して、遅い夏の濃い緑を曇り日の下に澱ませ、人家や寺なぞを埋めていた。

勉が予期していた狭山丘陵は扇状に拡がった武蔵野を一望に収め得る展望台であった。しかし実際は丘陵はすでに八十米高いこの辺の武蔵野から五十米聳えるにすぎず、視界は東方から丘陵の前奏曲をなす小高地によって遮られていた。

丘陵の突端まで行けばあるいは多少の展望が得られるかも知れないと勉は思ったが、しかしこの日彼は道子を連れていた。恋人たちは水を好むものである。彼は道子と一緒にこの人工の湖を左から迂回することにした。

露骨な都市計画的な美観によって作成された桜の並木を少し行くと、道は稜線に従って右へ折れた。湖の方は赤松の間を赤土の斜面が水面まで降り、同じ都市計画者が撒いたと思われる月見草がはかない黄色を点在させていた。下の方にうねった湖岸に沿って小径がついているのが、隠見されたが、恐らく水の清澄を保つためであろう、その方は道から下は立入禁止となっていた。水を恋うる恋人たちは裏切られた。

道に沿って休み茶屋は店を閉ざして荒廃していた。道を行く人もなく、あたりはしんとしていた。

勉は幸福であった。道子と二人でゆっくり歩くのは、二人がまだ恋を意識しなかったこ

ろ、野川を遡って以来である。
　勉はそれを道子にいわずにいられなかった。道子が「恋ヶ窪」で初めて自分の勉に対する感情を「恋」と呼んだ時のことを思い出した。あれからふた月と経っていない。それなのに自分はこんなに変ってしまった。それではあのころの生活はみな嘘で、今が本当なのだろうか。それとも今の苦しみが嘘で、あのころが本当なのだろうか。
　道子がこう反省している間、勉はしかしひたすら幸福に酔っていた。昔のわけ隔てのない親しさが、こうして二人で歩いていれば戻って来るように感じる。なぜそれを「恋」と名づけて推し進めなければならないのだろうか。
　道は時々ひどく水と離れるように思われたが、意外に深く喰い込んだ湖岸を迂回するためだと知られた。湖は丘の懐ろに水を溜めたものであるから、自然の浸蝕を受けない丘の腹の気紛れな輪郭によって、不自然に縁どられていたのである。水は岸のロームを変質させる暇なく、その代赭色を水際に沈ませていた。
　外側にも同じような谷が深く入り、古い水田と茶畑と藁屋根が侵入していた。南面したこの側は古来よく人に住まわれたところであり、暖かいその斜面に今は茶を産する。
　展望もあった。遠く武蔵野の緑が拡がり、はるかに「はけ」の林と、さらに遠く多摩丘陵まで見渡せた。その上の空に嵐の前触れをする巻雲が黒く聳えていた。突風が思い出したように吹きつけて来て、やっと穂をつけ出した道傍の芒を一斉になびかせた。
　「嵐来るかしら」
　と言って道子は空を仰いだ。低い雲の下をさらに低く、双発機が一つ、銀色の翼を鈍く光らせて、附近の飛行場を目指してゆるやかに下降しつつあった。
　「大丈夫さ。雨が降って来たら、引き返せばいい」と勉は笑った。
　沿岸監視人らしい制服を着た老人がゆっくり歩いて来た。彼はこんな天気に呑気に散歩している二人を、呆れたように見やってすれ違った。その監視人の姿が曲り角に消えると、勉は不意に、
　「入ろう」
　といって、立入禁止の札の傍から、湖に降りる木立の中へ踏み込んだ。
　「叱られない？」
　「ふふ、今彼奴が行ったところだから、ここは安全なのさ」
　と勉は兵隊らしい狡智を見せびらかして笑った。
　赤松の間に雑木を混えた林がゆるやかに湖岸まで下っていた。勉は湖岸まで降りて小径を伝って行くつもりであったが、やがて彼らが踏み込んだのが一つの岬にほかならず、両側の岸は意外に深く、ほとんど最初林に入った地点までくびるように喰い込んでいるのに気がついた。
　岬の突端の岸に近く、月見草の咲き乱れる間に二人は腰を下した。水は二人を取り囲き、水面には時々変る風の方向に従って、漣が右あるいは左に走った。
　勉は道子の肩を抱いた。二人の唇はあらかじめそうきめられていたもののように、自然

に合わさった。
　勉は道子の口に何か昔からよく知っているものを味わった。それはどこか遠い過去で彼が経験したことのある味わいであった。例えば幼いころ若い母の胸に嗅いだ匂いに似ていた。
　道子は男を嗅いだ。勉が復員して以来、彼女が彼に感じていた何か暗いものの匂いであった。彼女は驚いて眼を開け、身を引いた。
　勉の顔はしかしいつもの可愛い従弟であった。昔ながらのおとなしい少年であった。彼女は、混乱を感じた。
　二度目の接吻は長かった。道子は次第にせつなさを覚えた。口を寄せる前、彼女の上唇が酸いものを入れられた子供の口のように、心持まくれ上がったのを、唇を合わせながら、勉は快く思い出した。
　二人はじっとしていた。勉の唇は何も強いなかったから道子は安堵して来た。これが恋というものなら、してもかまわない、二人の子供の時からの親しさの行く手に、自然にこれがあったのなら仕方がない、と彼女は思った。ただ繰り返しさえしなければいいのだろう。彼女は生れて初めて味わったこの甘さを、いつまでも覚えていようと思った。
　風が梢を鳴らし始めた。湖面はいつか一面の三角波に蔽われていた。その白い波頭をならすように、湖心を風の脚が移って行くのが見えた。
　雨が頬に当った。二人は立ち上り、道まで引き返した。武蔵野はすでに煙り、雲が一面に低迷していた。貯水池の中央を区切る第二の堰堤を渡る時、二人は絶え間のない強い風に吹かれた。
　上の池は下の池より二十尺ばかり水位が高く、奥は丘陵の西縁を形づくる頂上が閉じ、その上から関東山地の山々が雲をかぶって、髪を振り乱した女のように覗きかかっていた。堤の袂で下の池へ水を落すところからは白い水煙があがり、時々風に吹き払われた。
　横なぐりの濃い雨が急に襲って来た。二人は急いで長い堰堤を渡り、袂の茶屋に駆け込んだ。
　復員服を着た若者がそそくさと雨戸をたてると、汚い裸の木の卓子を並べた土間は暗くなった。屋根のトタンを叩く雨の音が喧しかった。形式的にいいつけたサイダーを飲みながら、勉はしかし笑っていた。彼はいつまでも幸福であった。雨も嵐もこの時彼には快かった。
　「随分降って来たわね。大丈夫かしら」
　「どうかな。大したことはないだろう、颱風のおこぼれさ。傘を借りて行けばいい」
　しかし道子は落ち着かなかった。もう三時であった。颱風の余波にしては風と雨がひどすぎるような気がする。家はどうしているだろう。留守を頼んで来た手伝いの婆さんは、ちゃんと戸を閉めてくれたかしら。もし嵐がひどくなって家へ帰れなかったらどうしよう。秋山は何というだろう。
　道子は平然とサイダーを飲んでいる勉が憎らしくなった。と同時にこんな時にまで、家

のことを気にかけずにいられない自分が情けなくなった。
道子はやはり雨の止むのを空頼みにしていたが、風はますます強く、典型的な暴風雨型を現わして来た。茶屋の若者はいい加減で店を閉めて、下の村へ帰りたいらしく、二人に最初の堰堤の傍にあるホテルに行くようにすすめた。
結局二人はそこでただ風雨がひどくなるのを待っていたようなもので、ぼろ傘を一本買い求めて、雨の中へ出た。傘はすぐ風に破れて用をなさなくなった。対岸と同じく稜線を伝った道はところどころこわれて、石がごろごろしていた。伐採のため裸になった外側の斜面に、月見草が流れる赤土に打たれて伏していた。田園は斜めに切る雨に掻き消されていた。湖面も煙っていた。
二人は肌まで濡れながらひたすら急いだ。まだあるのかとがっかりさせる曲り角をいくつか曲って、ようやく目的のホテルの見えるところまで来た。
湖岸まで芝生を控えたホテルは荒れ果てていた。薄暗いロビイには大衆食堂のような安っぽい卓子と椅子が並んでいるだけであった。すべてが埃臭く、そして湿気ていた。
二人はそこで颱風が急に進路を変えて小田原へ上陸し、今まさにこの狭山丘陵へ向って進んでいること、彼らの乗るべき多摩湖線は配電線の故障で不通となったことを知った。
しかし何も考える暇はなかった。二人はとにかく濡れた着物を脱ぎ、粗末な格子縞の浴衣に着替えて、風呂へ入るまでは人心地がつかなかった。
二人が通された室は大きなダブル・ベッドがただ一つの装飾であるような種類の室であった。あとは形ばかり粗末な椅子が二つ置いてあるだけである。その椅子に向い合って道子は初めて事態が重大になったのを感じた。茶屋での懸念は本当になった。心に「どうしよう、どうしよう」と呟き続けたが、とにかく二人がここへ泊らねばならぬのは明瞭であった。彼女は自分と勉との間には、いつかこういう大変なことが起ると予感していたような気がした。
彼女のできることはただ貪るように勉の顔を見守ることだけであった。その顔からも今はさすがに不敵な笑いが消えて、考え深く窓外の雨のしぶきを見つめているだけである。
電気は切れていたので、暗くならないうちにといわれて、五時ごろ食堂でまずい夕飯を食べた。客は他に一組外国人とその連れがあるだけで、食堂はがらんとしていた。外国人は嵐がかえって面白いらしく口笛を吹いていた。雨はますます激しく、窓の両側から水が壁に伝い出した。窓から見える湖面は三角波の波頭が吹き飛ばされて白く霞みながら、次第に黄昏れようとしていた。
二人は言葉少なくただ電車が明日は通じるだろうかとか、家がどうなっているだろうかとか、考えてもしようがないことを、取り止めなく語り続けた。
夜小さな石油ランプが室へ持って来られた。
「勉さん、今夜はこうして起きていましょうね」
と道子は椅子の上でいった。勉は諾いた。しかし二人は愛していた。さし向いの室内で二人のすることは、さっき湖の傍でしたことよりなかった。

「どうしましょう。秋山はどうせあたしたちが今夜ここに泊ったことを許してくれないわ」
「いいじゃありませんか、僕たちちっとも疚しいことないんだから」
「だって、人はそうは思わないわ。ことに秋山は」
「僕が誘わなけりゃよかった」
「しようがないわ。あたしも来たかったんだから」
「僕たちさえしっかりしていれば、人がなんといおうと構わないと思うけど」
ランプは尽きかけていた。長い、いつ果てるともない接吻の後に、勉はしかし自然にある動作を抑えることができなかった。捉えられた道子は「いけません」と低く叫びながら、手を動かしていたが、やがて両手が勉の首にからんで、ただ口だけ「いけません、いけません」と繰り返すだけになった。勉の力に抵抗しながら、その力と離れるのを惜しむように、力に連れて彼女の体を開いて行った。
この瞬間は勉が長らく待ち望んでいたものかも知れなかった。その時彼は窓の外に音を聞いた。
ガタンという何か建物の外部構造のこわれるらしい音に続いて、細く鋭い音が起った。それは何か人声に似て、細く長く哭くように、嵐の戸外に満ちた雑然たる物音を貫いて響き渡った。
勉は振り向いた。
声は今彼の前に崩れようとしている道子の魂の哭く声のように思えた。
「それをしてはいけません、それだけはしないで」とその魂はいっているようであった。
「これだけはするべきではない」と彼の内心の声もいった。もし道子の心がそれを欲していないならば、するべきではない。
勉は彼の首にからんだ道子の腕を取り、それを彼女の胸の上に畳んでやった。道子の首は子供が「いやいや」をするように、かすかに左右に揺れていた。閉じた眼が悩んだ顔に切り傷のようについていた。
道子はやがて勉の体との間の距離に気がつき、眼を開けた。勉は微笑んだ。彼女の不審と驚きの表情に不意に歓喜が輝いた。勉の首を抱いて、
「えらいわ、勉さん。あなたはやっぱりいい子ね」
といって、彼の顔を接吻で蔽った。
勉は自分が今犠牲にしたものと、こうして接吻される喜びと、どっちがよかったのかわからなかった。
それから二人は朝まで暗闇の中で並んで目醒めていた。勉はなお戸外に続く哭くような音に耳を傾け、道子は時々大きくなる彼の息だけを聞いていた。

◎　参考

「『武蔵野夫人』の地理学的一考察：水系を中心に」古田悦造（東京学芸大学地理学）：東京学芸大学紀要 第３部門 社会科学 56, P43-50, 2005-01-31　から引用

主な４つの場面

①　秋山夫人の道子と勉の２人が、「はけ」の南を流れる野川の水源を求めて、恋ヶ窪まで散策する場面

②　道子と勉の２人が、狭山の村山貯水池を散策し、台風のために宿泊せざるを得なかった場面

③　秋山と大野夫人の富子が、河口湖畔へ１泊２日の旅行をする場面

④　道子が自殺する日の夜に、勉のアパートを富子が訪問する場面

①と②は道子と勉の恋愛感情までで終始しているが、③は秋山と富子の肉体関係が形成され、④も勉と富子の肉体関係が形成されている。

純愛である①と②は多摩川水系であるのに対し、肉体不倫関係にまで至る③は相模川水系、④は目黒川流域と、両者は多摩川水系以外であり、使い分けがなされていると解釈することができる。

さらに勉は、相模川水系の富士山に対し、かつて自分の恋の普遍の姿に映ったが、秋山と富子の行為により汚れたものとして、恋愛の理想の場所でなくなり、死を連想させるに至ったと思われる。